

B. Kumaravadivelu の KARDS (Knowing, Analyzing, Recognizing, Doing, and Seeing) を用いた日本の英語科教員の資質能力の探求

渡邊 大太・寺西 雅之

1. 研究背景

中等教育における英語科教員は、他教科と比較して特異な状況に置かれている。英語科は大学受験に必要な科目であると同時に、社会的な要請としてスピーキング等のアウトプット能力も求められる独自性を持つ。こうした状況を踏まえると、現行の教員の資質能力基準が英語科の特性を十分に反映していない可能性がある。

教員の能力評価の指標として、文部科学省は 2016 年に「教職員に必要な素養」「学習指導」「生徒指導」「特別な配慮や支援を必要とする子供への対応」「ICT や情報教育の活用」といった項目を示している（文部科学省、2016）。しかし、これらの指標は教員全体を対象とした一般的なものであり、英語科固有の資質能力については言及されていない。英語科と他教科の差異は考慮されておらず、英語科教員の英語力の目標として示された英検準 1 級、TOEIC730 点相当という基準も、教員以外の他職種にも適用可能な能力水準である可能性があり、英語科教員に特有の必要性を示す根拠が不明確であるという疑問が提起される。

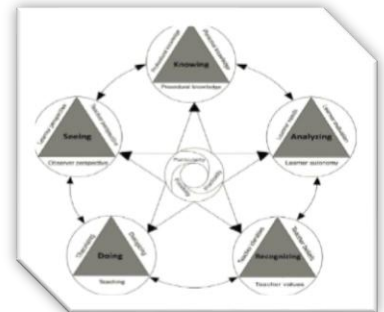
英語科教員の資質能力に関する先行研究として、酒井・久村（2011）は「英語力」「英語教授力」「英語授業力」「英語指導力」「教職としての適性」の 5 項目を提示している。しかし、これらの項目は「英語」を他教科の名称に置き換えた場合でも、十分に共通する要素が含まれると考えられる。また、林（2019）は、共感的態度で接し、「誰も受け入れることができる懐の深さ」、「生徒のニーズ分析、分析や反省的態度」、「常に向上しようとするプロとしての自覚」、そして「英語が溢れ出すコミュニケーターとしての適性」という 4 項目を分類しているが、これも国語科にも適用できる可能性がある。これらの先行研究における定義は、他教科と異なる状況に置かれている英語科教員の特性を明確に示すには不十分と考えられる。

以上の背景から、他教科との差異が存在する英語科教員の資質能力を探求することの社会的ならびに教育的意義の観点から本研究に着手する。本稿では、研究の途中経過を報告し、今後の課題および方向性を示すことを目的とする。

2. B. Kumaravadivelu による KARDS

本研究では、Kumaravadivelu（2011）が提唱する 5 つのモジュール、KARDS (Knowing, Analyzing, Recognizing, Doing, and Seeing) を理論的枠組みとして採用する。KARDS は、Kumaravadivelu の著作において「言語教師が自己決定し、自己変革を遂げるために基本的に行うべきこと」と定義されている（p. 17）。

KARDS の運用における前提条件として、Kumaravadivelu はグローバル化の 5 つの視点、すなわち Post National (グローバル社会を生きる)、Post Modern (多様な価値観との共存)、Post Colonial (西洋中心主義からの脱却)、Post Transmission (知識伝達型教育からの脱却)、Post Method (唯一無二の教授法の否定) を挙げている。また、運用原理として、場の特殊性 (Particularity)、実践性 (Practicality)、可能性 (Possibility) が示されている。これらの前提条件と運用原理を踏まえ、KARDS の各要素、すなわち Knowing (専門的・個人的・手続きの知識基盤)、Analyzing (学習者のニーズ・動機・自律性の分析)、Recognizing (教師のアイデンティティ・信念・価値観の認識)、Doing (教授・理論化・対話の実践)、Seeing (学習者・教師・観察者の視点からの教育行為の考察) の必要性が解説されている。これらの要素は独立しているが、相互に有機的に関連している点が重要であるとされている。



(Kumaravadivelu, 2011, p.125)

3. Research Questions

Kumaravadivelu が「現場の教員が実践を理論化し、そして理論を実践すべき」（p. 15）と主張するように、日本の英語科教員が自身の資質能力を現場で探求し、理論化することには、教育的および社会的な意義が期待される。また、Output 能力の必要性が求められ、教員からの学習者への一方通行が是とされない Post Transmission の時代において、KARDS を用いて教員の資質能力を探求することは、英語科教員のあり方に関する示唆を与える可能性がある。

以上の考察に基づき、本研究では以下の研究課題を設定する。

- ① 日本の中等教育に属する英語科教員が考える KARDS の関連性から、どのような知見が得られるか？
- ② 日本の英語科教員が考える KARDS (Knowing, Analyzing, Recognizing, Doing, Seeing) の具体的な内容ならびに定義は何か？

4. 研究手法

本研究では質的調査を先行し、その結果分析に基づく量的調査を実施する Exploratory Sequential Design (Creswell, 2022) を採用する。本稿では、前半の質的調査に焦点を当て、その分析と考察を行う。質的調査として、理論的枠組みである KARDS に基づき、日本の中等教育に所属する英語科教員 3 名に対し、約 1 時間 30 分の半構造化インタビューを実施した。参加者は、①受験指導を行う私立中高の K 教員 (男性、教員経験約 10 年)、②受験指導を必要としない中高一貫校の M 教員 (男性、教員経験約 30 年)、③公立中等教育の Y 教員 (女性、教員経験約 15 年) である。

インタビュー項目の一部を以下に示す (インタビュー 3 日前に質問を提示)。

- 自分の学び (知識) を重ねることで、授業の実践はどのように変わったか？
- 学習者のニーズを分析することで、教員としてのアイデンティティや価値観にどんな影響があったか？
- 自己認識 (長所や短所) が、自分の学び方にどのように影響するか？
- 他の教員との話し合いや学び合いから気付いたことはあるか？
- クラス外での生徒の観察が、クラス内の生徒についての分析にどのように役立つか？
- 自分の教育実践を理論化することは可能か？理論化するために必要なことは？
- まとめ、振り返り、未来への質問

データ分析には、SCAT: Steps for Coding and Theorization (大谷, 2019) を用いる。

5. K 教員の結果分析

本稿では、K 教員に対するインタビューの分析結果を示す。インタビュー項目は KARDS の各領域に偏らないように作成したが、K 教員の発言内容から、特定の領域のつながりに重点が置かれる傾向が見られたため、その順に分析結果を記述する。

① Doing (実践) × Analyzing (学習者分析) について

K 教員は、実践を最も重要な要素と捉えている。学習者のニーズと実践の関連性から生まれる充実感を重視し、難易度の高さが学習者の動機付けに繋がると考えている。教員が設定する英語力目標に対する学習者の動機が重要であり、それが学習者の自律的な学びの第一歩になると捉えている。また、学習者分析は英語科教員の実践そのものであると強く主張し、英語学習者の状況に応じた授業実践の必要性を指摘する。授業実践においては、学習者が協働して正しい英語を探索する試みを重視し、その過程における試行錯誤を通じて学習者の自律性を育成することを目指す。協働は学習者間だけでなく教員との間にも及ぶとし、さらに学習者の個別最適化指導の重要性も強調している。

①-ii Analyzing (学習者分析) × Recognizing (自己認識) について

K 教員は、受験校に所属する学習者のニーズ分析から、英語 4 技能教育の必要性を認識しつつも、2 技能 (リーディングとライティング) の教授に重点を置く姿勢を持つ。例えば、英作文の授業で学習者が正確な英語について議論の様子を見て、自身の厳密な英語を教えるべきというアイデンティティ、信念、価値観を強化する。協働学習において学習者が主体的に学ぶためには、英語科教員が学習者のアウトプットする英語の正確性を判断できる英語力が必要であると主張する。同時に、議論などの協働が苦手な学習者に対しては、安心感を与える個別最適化を重視した授業運営を信条としている。さらに、K 教員は日本の中等教育における学習者が英語を英語で理解したり、英語で思考したりすることの可能性を否定的に捉え、日本語という言語および日本の文化背景に基づいた英語教育のあり方を検討すべきという強い意見を持つ。その上で、英語科教員一人ひとりが適切な英語教授法を探索すべきという信念を持つ。

①-iii Doing (実践) × Recognizing (自己認識) について

K 教員は、教員の (英語) 教育的価値観や信念が教育実践の方向性を決定すると考えている。教員が正しいと考えることが、学習者にとって重要な学びの要素となると述べている。自身の教授実践においては、正確な英語に関する論理性を重視しており、文法や構文だけでなく、前後関係、背景、文脈を含む厳密性を重要視する。また、実践において学習者中心の学びに寄り添える英語科教員の能力の必要性を感じており、学習者自身の英語への気づきを待つ姿勢を心がけている。

